

遺族の想い

今年4月24日、戦後、旧ソ連で拘留中に亡くなった、茨城町出身の林静一さんの遺骨が遺族のもとに返還されました。
今回、林静一さんの孫・林友子さん（茨城町木部在住）にお話を聞きました。

遺骨返還を受けて

「遺骨が返還されたことは、奇跡のようです。ご尽力くださった関係者の皆様に深く感謝しております。一方で、海で亡くなった方など、遺骨の場所が特定できず、帰ってこれない方もたくさんいます。その方たちのことを思うと、申し訳なさを感じます。待ち望んでいるご家族に一日も早い朗報が届くことを願っています。」

林静一さんは、旧ソ連に拘留されていた期間、強制労働に従事させられたそうです。昭和21年11月、36歳の時に旧ソ連の東カザフスタン州（現・カザフスタン）で亡くなりました。

「祖父は5人兄弟の長男でした。戦死したのは祖父だけです。五男は『自分も同じようにカザフスタンに送られたが、兄は自分よりもひどい所に送られた。』と言っていました。11月という

日本でも寒い時期。現地はどれほど寒かっただろう。祖父には会ったことがないけれど、祖父の話をするだけで胸がいっぱいになってしまいます。」

涙ぐみながら、友子さんは話を続けます。

「今回の遺骨返還を一番喜んでるのは、亡くなった私の父・静一だと思います。いつか父親（静一さん）の遺骨が家に帰ってこれるだろうと、ずっとその想いだけで生きていたと思いますから。」

「父が小学6年生の時に、祖父がいなくなり、その時から、母を支え、一家の大黒柱にならなくてはいけないという、大人にならざるを得ない状況で生きてきたと思います。父親に会いたいという想いと、帰ってこれない父親がかわいそう、悔しい、という想いをずっと抱えていたことでしょう。」

父・静一さんの活動

友子さんの父・静一さんは、遺族会の一員として、各国で慰霊巡拝や遺骨収集の活動をしてきました。

「父は中学にほとんど行くことができず、働いていたそうです。学校で勉強ができなかったことが悔しく、だからこそ、どこかで人生を挽回したいと思っていたはずなんです。遺族会の皆様は、父にとって同志のような存在でした。自分と同じように辛い体験をしてきた方たちであり、励まされ助けられてきたと思います。父が輝いていたのは、遺族会の慰霊巡拝や遺骨収集といった活動が生きがいになっていたからだと思います。」

友子さんは、自宅にある静一さんの活動記録を見ながら、語りま

す。「遺骨収集のエピソードは父や会員の方から聞いていました。場所によっては、電波は届かず、シャワーも無く、寝る場所は廊下、ということもあったそうです。しかもトイレはぼっとんトイレで、ドアは複数あっても中はつながっており、隣の人が丸見えの状態だったと言っていました。また、とある防空壕での遺骨収

戦争と向き合えなかった

友子さんが、戦争について語る事ができるようになったのは、約15年前。自身が40代のときだったと言います。

「小学1年生のとき、祖母から戦争の話を書きました。祖父の戦死や、人が殺し合ったことから、『戦争は怖い』と思い、その夜は眠れませんでした。そして、『もう戦争ないよね?』と祖母に繰り返し聞いたことを覚えています。以来、メディアの戦争特集などは苦しくて見られず、『戦争』に関する話は、見ることも、聞くことも、話すことも、全てをシャットアウトしていました。」

父親が亡くなり、自身が遺族会に加入したことで、「目を背けたままではいけない。」と思い、『戦争』に向き合えるようになっていったそうです。

遺族会の活動風景（林静一さんの活動記録より）



林友子さんの父・林静一さん

平和への想い

「私が子どもと一緒にアニメ映画『トイ・ストーリー』を観ていると、とても心に残ったセリフがあります。主人公のウッディが、恐ろしい男の子の家から自分の家に帰るとき、『おうちが一番! おうちが一番!』と言うのです。このセリフを聞いたとき、『そうよね、その気持ちよく分かる。平和ってそれよね。』と強く思いました。」

技術は日々進歩しているのに、なぜ人間は戦争をやめないのか、と林さんは言います。「戦争は、些細な争いから発展するものです。今、日本は平和ですが、テレビなどで見る世界の悲惨な状況が、明日、日本で起こるかもしれない。望まぬ争いが大切なものを奪ってしまう危機感を持っていないかと思っています。」

戦後80年というこの機会に、子どもから大人まで一人ひとりが『戦争を二度と起こさないために、自分たちはどうすればいいのか。』を考え、『平和』に対する意識を高めてほしいと願っています。」

